

国立国語研究所学術情報リポジトリ

八戸市方言の名詞アクセントに関する調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅沼, 健太郎, 岩崎, 真梨子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003272

八戸市方言の名詞アクセントに関する調査報告

菅沼 健太郎⁶

岩崎 真梨子⁷

1. はじめに

本報告書は青森県八戸市方言の名詞のアクセント体系に関する考察を述べるものである。調査において、我々の班が収集する予定であった基礎語彙は総計 258 語であったが、時間の都合上、内 93 語は Lawrence 班に委託した。以下にデータ収集にご協力いただいた話者の方々の情報を示す。この場を借りて同氏たちに感謝申し上げる。

1. A 氏 1948 年生まれ、男性。我々の班での語彙収集にご協力いただいた。
B 氏 1923 年生まれ、女性。Lawrence 班での語彙収集にご協力いただいた。
両氏はともに言語形成期を青森県八戸市で過ごした方々である。

本報告書では、まず A 氏から得たデータの考察を行い、その後 B 氏から得たデータの考察を行う。なお、我々の調査した語彙は植物、食物、動物などの名詞が主であった。よって本報告書は名詞のアクセントに関するものとなる。また、我々が A 氏の協力の下調査した語彙は 165 語、Lawrence 班に委託したものが 93 語であったが、該当する語彙が八戸市方言にない、あるいはあまり使わない語彙のため、収集しなかった語彙があった。それらを除くと A 氏からは合計 142 語（内名詞は 141 語）、B 氏からは 91（内名詞は 89 語）語収集したことになる。どのような語彙を収集したかは末尾の補遺を参照されたい。なお、データの中には、助詞付きの音形が収集できていない、単独発話ではない、といった形で、アクセント体系を明らかにするためのデータとしては不十分なものも含まれることをここで述べておく。

2. 先行研究（上野 1977）

具体的なデータをみる前に、ここで先行研究として、八戸市方言ではないが弘前市方言の名詞アクセントの分析を行った上野（1977）をみてみることにする。上野（1977）をみ

⁶ すがぬま けんたろう：金沢大学・助教 suganumak@staff.kanazawa-u.ac.jp

⁷ いわさき まりこ：八戸工業大学・講師 iwasaki@hi-tech.ac.jp

ると、弘前市方言の名詞は n 拍+1 通りのアクセント型をもつことがわかる。それに加えて、名詞単独発話（以下「言い切り」と呼ぶ）と、助詞が付いた文中等での発話（以下「助詞付き」と呼ぶ）では同じ語であってもアクセントの実現に違いがみられることがわかる⁸。

2. 上野（1977）の弘前市方言の名詞アクセント ※ — は高音調、\ は下降調を表す。

	言い切り	助詞付き
1 拍 : 2 パターン	i. エ (柄)	エモ
	ii. エ (絵)	エモ
2 拍 : 3 パターン	i. カゼ	カゼモ
	ii. サル	サルモ
	iii. ヤマ	ヤマモ
3 拍 : 4 パターン	i. サクラ	サクラモ

⁸ 正確には、上野（1977）は、以下に示すように名詞単独と助詞付き名詞それぞれに「言い切りの形」と後に用言などが続く「接続の形」があり、計4種それぞれでアクセントの実現形、特に下降が現れるか否かが異なるという。以下では言い切りの形の末尾に「。」、接続の形の末尾に「…」を付す。

- i. 名詞単独・言い切り サル。
- ii. 名詞単独・接続 サル…
- ii. 助詞付き・言い切り サルモ。
- iv. 助詞付き・接続 サルモ…

今回の八戸市方言においても、ii. 名詞単独・接続の例があり、それが言い切りと異なる場合があった（例：カボチャ。カボチャ…）。しかし、同時に同じアクセント型を示す例もあった（例：ニジ。ニジ…“虹”）。いずれにしろ、今回の調査ではこの4種類すべてを網羅的に調べることはできなかったため、本報告書ではもっと多く収集できた i. 名詞単独・言い切りと iv. 助詞付き・接続に的を絞る。これ以降本報告書で、「言い切り」と言った場合、それは上の i. 名詞単独・言い切りにあたり、助詞付きと言った場合、それは iv. 助詞付き・接続にあたる。

「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
青森県八戸方言調査報告書
2021年3月 国立国語研究所

ii.	キツネ	キツネモ
iii.	ウサギ	ウサギモ
iv.	オトコ	オトコモ
4拍：5パターン	i.	トモダチ
	ii.	ウルコメ（粳米）ウルコメモ
	iii.	テブクロ
	iv.	クダモノ
	v.	カミナリ

[上野 (1977) p. 297 表9より一部抜粋]

上野 (1977) は、東京方言では次拍の低音調を引き起こすアクセント核（すなわち下げ核）の有無とその位置が弁別的である一方で、弘前市方言では直前の拍の低音調を引き起こすアクセント核（ここでは上げ核と呼び'で表記する）の有無とその位置が弁別的であるとし、「がない語においてはアクセント単位の末位（すなわち助詞も含めた語末）のみが高くなるとしている。上野 (1977) の論考をもとに弘前市方言のアクセント規則を形式化するならば、以下の(3)ようになるであろう。

3. i. '以前の拍を低音調とし、'以降の拍を高音調とせよ。⁹
- ii. 'がない場合、語末音節のみを高音調とせよ。
- iii. 'をもつ語の言い切りの発話では語末拍を低音調とせよ。ただし、語末拍に'がある場合、この低音調と合わせ下降調(＼)とせよ。

⁹ 上野 (1977) は'は直前を下げる機能のみをもつとしており、「がそれ以降を上げる機能をもつとは述べていない。これを忠実に規則に反映させるならば、(3i)の「'以降を高音調とせよ」という部分は削除し、「高低が決定されていない拍を全て高音調とせよ」とするような、高音調を実現させる別個の規則を設定することになる。本報告書では規則の数を減らし複雑さを軽減するため、便宜上「'以降を高音調とせよ」とした。

※ 規則 iii は規則 i が適用されたのちに適用される。

(2) の 2 拍名詞を例に挙げれば、以下に示す形でアクセント型が導き出される。なお、ここでいう語末というのは、助詞も含めた語の末尾のことであり、以降もこのような意味で語末という用語を用いることにする。

4. a. 無核：カゼ

i. 言い切り /カゼ/ (3ii) により → カ $\overline{ゼ}$

ii. 助詞付き /カゼ-モ/ (3ii) により → カゼ- $\overline{モ}$

b. 1 拍目に ' : ' サル

i. 言い切り /'サル/ (3i, iii) により → $\overline{\text{サル}}$

ii. 助詞付き /'サル-モ/ (3i) により → $\overline{\text{サル-モ}}$

c. 2 拍目に ' : ヤ'マ

i. 言い切り /ヤ'マ/ (3i, iii) により → ヤ $\overline{\overset{\wedge}{マ}}$

ii. 助詞付き /ヤ'マ-モ/ (3i) により → ヤ $\overline{\overset{\wedge}{マ-モ}}$

なお、(3) の規則において、i と iii は拍を参照する規則、ii は音節を参照する規則になっているが、上野 (1977) で挙げられているデータは全て 1 拍軽音節の連続した語であり、(3) の規則全てが音節を対象としたものであったとしても、拍を対象としたものであったとしても、上野 (1977) で挙げられているデータに関する限りでは正しい音形を導くことができる。本報告書では後に (3) に変更を加えた規則を八戸市方言に導入するため、その際に、変更点が最小限になるように (3) の段階から ii は音節を参照した規則、iii は拍を参照した規則とした (i に関しては拍であっても、音節であっても構わない)。この点については、3.1.2. 節で再び取り上げる。

次節では我々が得た八戸市方言のデータをみていくことにする。

3. 八戸市方言の名詞のアクセント型

3.1. A 氏の場合

3.1.1. 2拍名詞の場合

収集語彙のうち、最も多く収集できた2拍名詞をみてみると、上の(4)に示した弘前市方言と同一、または近似する以下の3つのアクセント型が安定して現れた。それぞれの型をここでは、無核型、頭高型、尾高型と呼ぶことにする¹⁰。また、無核型と尾高型では(6a, b)と(8c, d)に示すように「泡」と「粟」というミニマルペアと目されるものが観察された。これらは、言い切りの音調は同じになるが、助詞付きの際に、どこから高音調が始まるかが異なる。

5. 2拍名詞のアクセント型 ※ 以下では○は拍、-は形態素境界を表す。

- i. 無核型 ((4a) のカゼに近似) : 言い切りの場合、助詞付きの場合ともに語末拍に高音調が現れる。ただし、言い切りの場合は単なる高音調ではなく、そこに低音調が加わった下降調となる。

言い切り ○[○] 助詞付き ○○-○

- ii. 頭高型 ((4b) のサルと同一) : 言い切りの場合、1拍目が高くなる。助詞付きの場合、助詞までの全体が高く平らになる。

言い切り ○○ 助詞付き ○○-○

- iii. 尾高型 ((4c) のヤマと同一) : 言い切りの場合は無核型と同じく下降調が現れる。助詞がついた場合は、無核型と異なり高音調が名詞の2拍目から開始する。

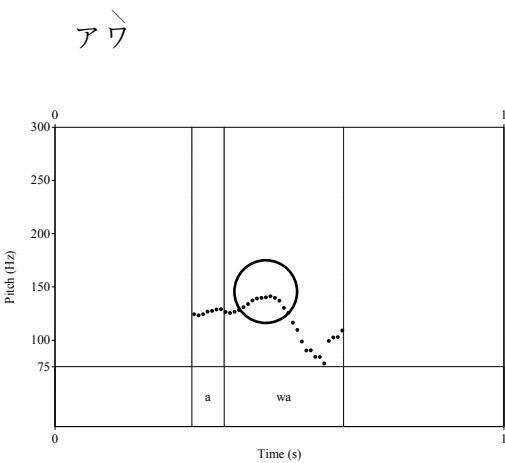
言い切り ○[○] 助詞付き ○○-○

以下にそれぞれの型に当てはまる語例のピッチ曲線を2例ずつ示す。なお、ピッチ曲線内で高音調がある部分に丸を付した。さらに、助詞付きの例においては、該当する「名詞+助詞」の部分にも丸を付した。

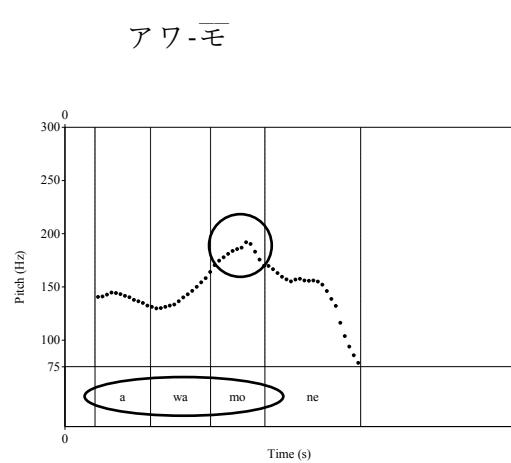
6. 無核型：言い切り ○[○]、助詞付き ○○-○

¹⁰ 無核型と尾高型は言い切りの際、語末拍が下降調となる。この際、拍内下降実現のために母音が半長で実現する。

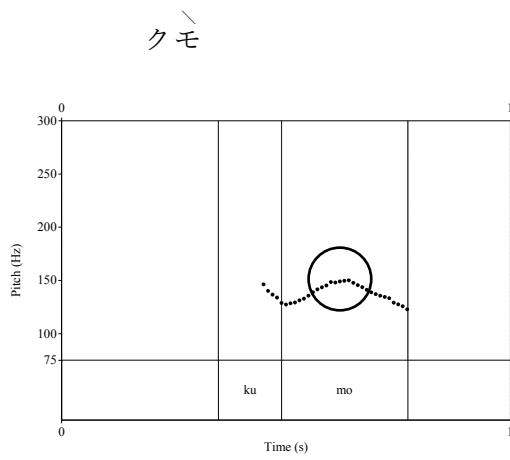
a. 泡 (言い切り)



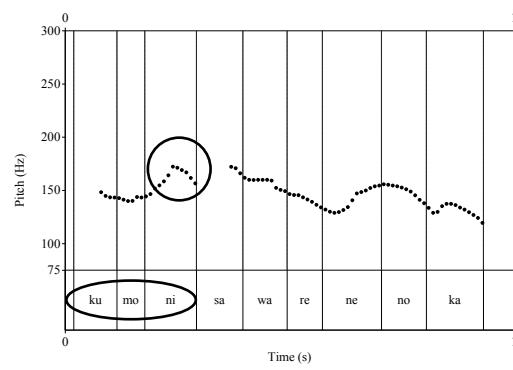
b. 泡もない。(助詞付き)



c. 蜘蛛 (言い切り)



d. 蜘蛛に触れないのか。(助詞付き)



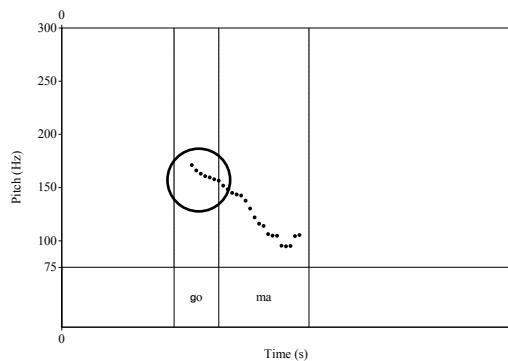
7. 頭高型：言い切り $\overline{\text{O}}\text{O}$ 、助詞付き $\text{O}\text{O}-\overline{\text{O}}$

a. 胡麻（言い切り）

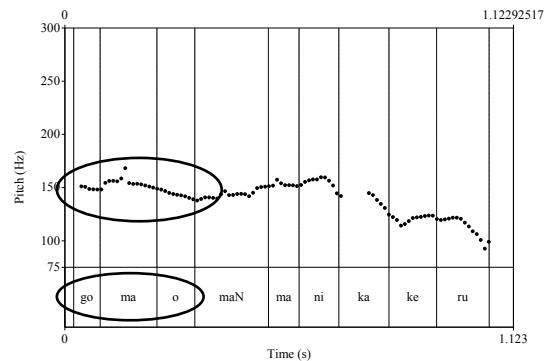
b. 胡麻をまんまにかける（助詞付き）

“胡麻をご飯にかける”

$\overline{\text{ゴマ}}$



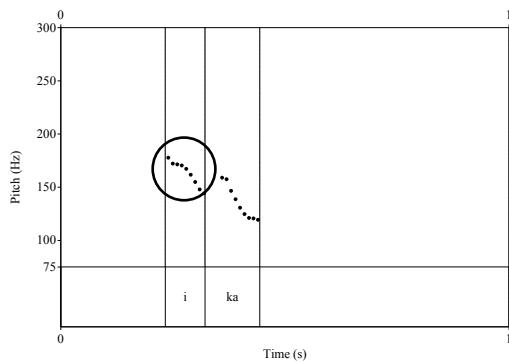
$\overline{\text{ゴマ}}-\overline{\text{オ}}$



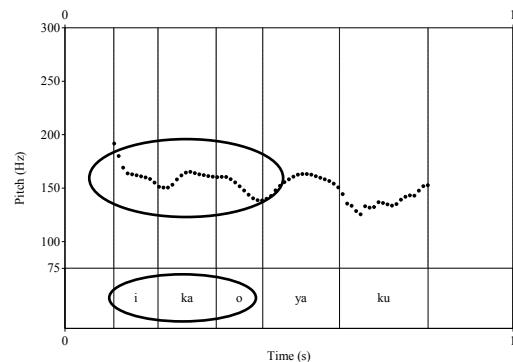
c. イカ（言い切り）

d. イカを焼く（助詞付き）

$\overline{\text{イカ}}$



$\overline{\text{イカ}}-\overline{\text{オ}}$

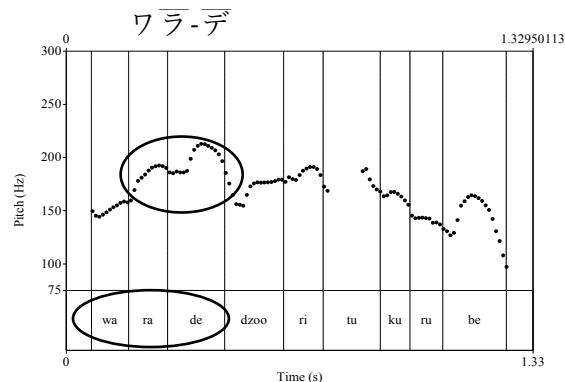
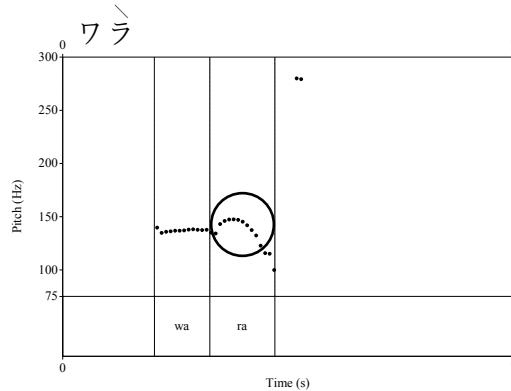


8. 尾高型：言い切り ○○、助詞付き ○○-○

a. 薫（言い切り）

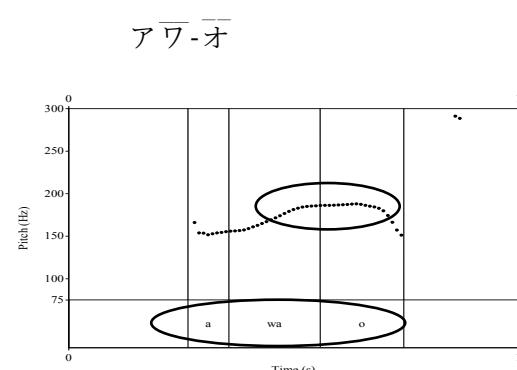
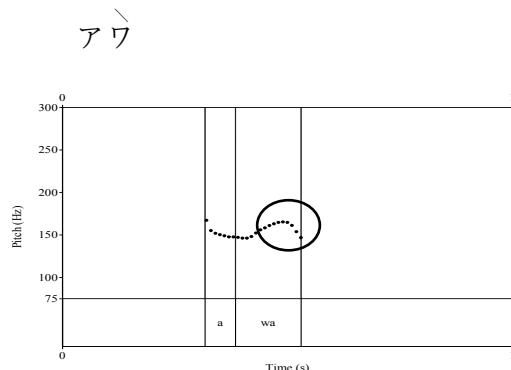
b. 薫で草履作るべ。（助詞付き）

“薫で草履を作ろう”



c. 粟（言い切り）

d. 粟を<飯に混ぜる>（助詞付き）¹¹



(5) から (8) をみる限り、A 氏のアクセント型は弘前市方言と同一の形で捉えることができると考えられる。異なるのは、(4a) に近似する無核型で下降調が生じる点である。この点を踏まえ、(3) を基盤に A 氏のアクセント型を導く規則を記述するならば、以下のようになる。

9. A 氏のアクセント規則

i. ' 以前の拍を低音調とし、' 以降の拍を高音調とせよ。

¹¹ (8) の発話では「粟を」の後ポーズが生じた。これ以後、<> をポーズ後の発話内容を表すために用いる。

- ii. ' がない場合、語末音節のみを高音調とせよ。
iii. 言い切りの発話では語末拍を低音調とせよ。ただし語末拍のみが高音調をもつ場合、その高音調を維持し、低音調と合わせ下降調とせよ。
※ 規則 iii は規則 i と ii が適用されたのちに適用される。

10. A 氏の八戸市方言のアクセント型

- a. 無核型 (' の指定なし) : アワ (泡)

i. 言い切り /アワ/ (9 ii, iii) により → アワ
ii. 助詞付き /アワ-モ/ (9 ii) により → アワ-モ

- b. 頭高型 (1 拍目に ' の指定あり) : 'ゴマ

i. 言い切り /'ゴマ/ (9 i, iii) により → ゴマ
ii. 助詞付き /'ゴマ-オ/ (9 i) により → ゴマ-オ

- c. 尾高型 (名詞の末拍に ' の指定あり) : ワ'ラ

i. 言い切り /ワ'ラ/ (9 i, iii) により → ワラ
ii. 助詞付き /ワ'ラ-デ/ (9 i) により → ワラ-デ

3.1.2. 3 拍、および 4 拍以上の名詞の場合

2 拍名詞の次に多く収集した 3 拍名詞においても、(11) に示すように、上野 (1977) の弘前市方言と近似する 4 つのアクセント型が得られた。2 拍名詞で 3 型、3 拍名詞で 4 型得られたことから、八戸市方言の名詞は弘前市方言や東京方言と同じく n 拍 + 1 通りのアクセント型をもつと考えられる。このように考えると、4 拍では 5 通り、5 拍では 6 通り存在することが予測されるが、今回は 4 拍以上の語彙は収集例が少ないこともあり、以下の (12) に示すように一部の型しか確認できなかった。なお、以下では語中拍に ' をもつと目されるものを新たに中高型と呼ぶことにする。

11. 3 拍名詞のアクセント型

言い切り 助詞付き

- i. 無核型 /タマゴ/ タマゴ /タマゴ-モ/ タマゴ-モ

ii. 頭高型 /'イルカ/ イルカ /'イルカ-ガ/ イルカ-ガ

iii. 中高型 /ク'ジラ/ クジラ /ク'ジラ-ヲ/ クジラ-ヲ

iv. 尾高型 /ハタ'ケ/ ハタケ /ハタ'ケ-サ/ ハタケ-サ

12. 4拍以上の名詞

言い切り 助詞付き

i. 無核型 /ムギワラ/ ムギワラ /ムギワラ-デ/ ムギワラ-デ

/イナビカリ/ イナビカリ /イナビカリ-ガ/ イナビカリ-ア¹²

ii. 頭高型 /トビウオ/ トビウオ /トビウオ-ガ/ トビウオ-ア

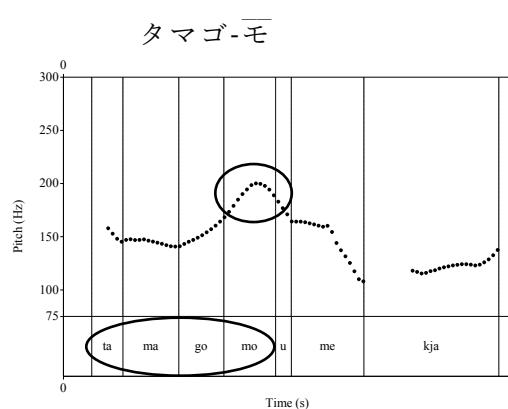
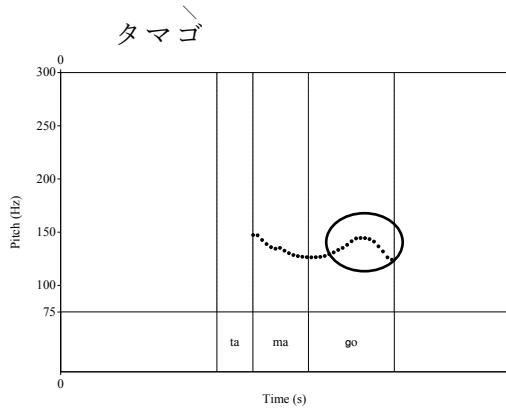
以下に3拍名詞のピッチ曲線を1例ずつ示す。

13. 無核

a. タマゴ（言い切り）

b. タマゴもうめっきや。（助詞付き）

“タマゴもおいしい”

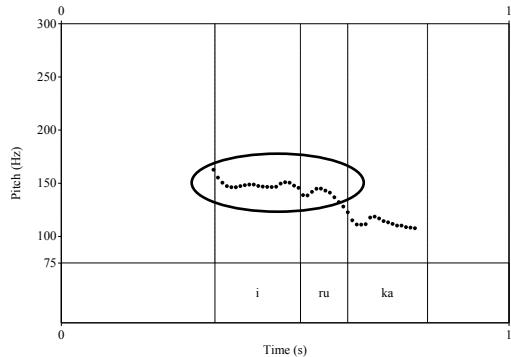


¹² 「ア」は共通語の主格の「ガ」に相当する。

14. 頭高

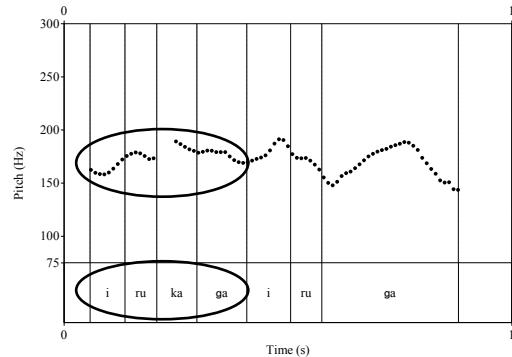
a. イルカ (言い切り)

イルカ



b. イルカがいるか。(助詞付き)

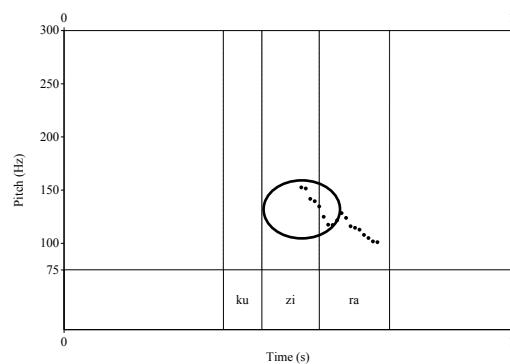
イルカ-ガ



15. 中高

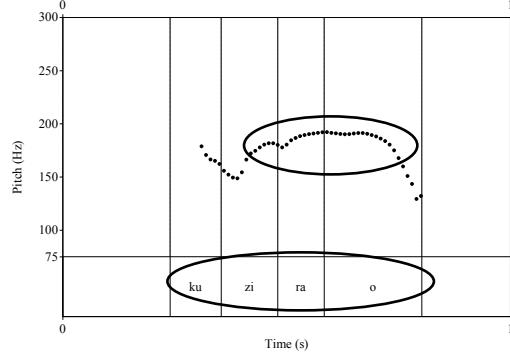
a. クジラ (言い切り)

クジラ



b. クジラを<食う>。(助詞付き)

クジラ-ヲ

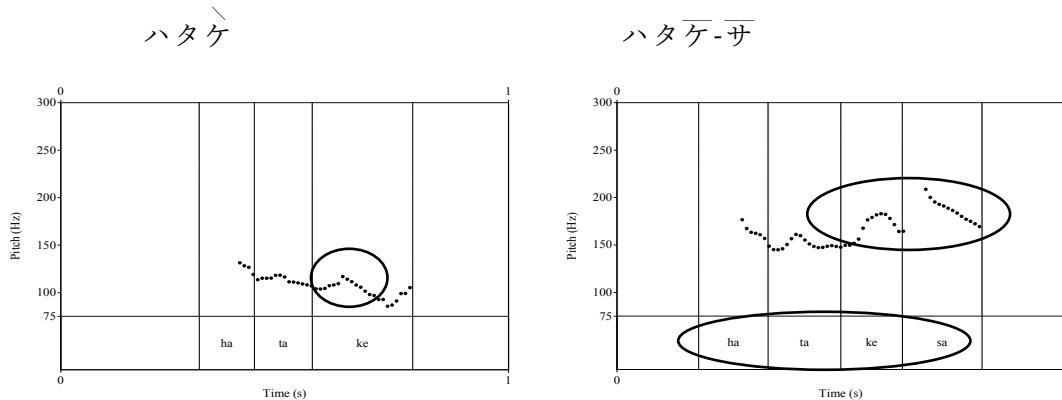


16. 尾高

a. ハタケ (言い切り)¹³

b. ハタケさ <種まくべ> (助詞付き)

“畑に種をまこう”



また、3拍以上の名詞では語末に重音節をもつ語例（ダイコン）が収集できた。ダイコンは無核であり、これの言い切りの形ではダイコンのように自立拍が高く特殊拍（ン）が低くなかった。この音形は、以下の（17）に示すように（9ii）の規則によって「コン」の部分に高音調が付与され、その後、（9iii）の規則により「ン」の部分が低音調となったと考えることで説明ができる。ゆえに（9ii）の規則は音節を参照する規則であり、（9iii）は拍を参照する規則でなければならないのである。

17. ダイコンの派生過程

基底形 /ダイコン/

規則 (9ii) ダイコン

規則 (9iii) ダイコン

次節ではB氏のアクセント型に関する考察を行う。

¹³ (16) のハタケは、/ハタ'ケ/ のようにケの部分が上げ核をもつと目されるが、ハタの部分はそれほど低音調で実現していない。これを考慮すると、八戸市方言の'は「それ以降を高くする」機能のみをもつと解釈すべきかもしれない。

3.2. B 氏の場合

3.2.1. 頭高 B 型の存在

A 氏との共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

18. 共通点

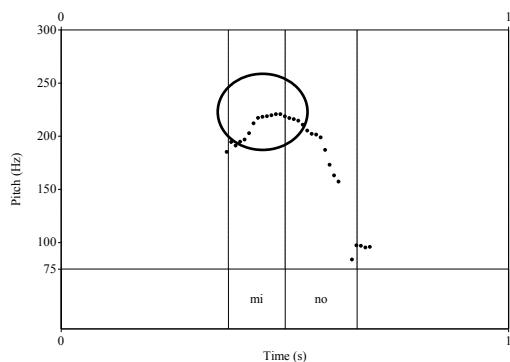
頭高型と尾高型が観察された。各々のピッチ曲線を (20) と (21) に示す。

19. 相違点

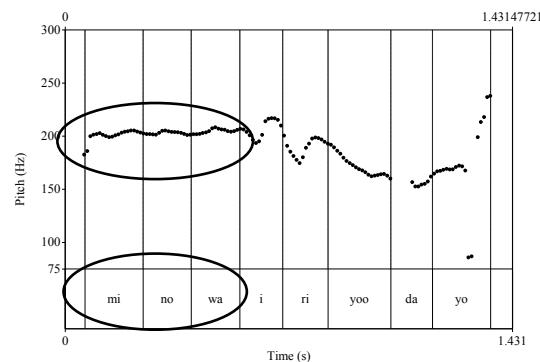
- 中高型と考えられる例が見当たらなかった。偶発的なものである可能性もあるため、ここではこの原因について立ち入らないことにする。
- A 氏でいうところの無核型が観察されず、それと入れ替わる形で (22) に示す型が観察された。これ以降、これを頭高 B 型と呼ぶ。

20. 頭高型：言い切り $\overline{\circ}\circ$ 、助詞付き $\circ\circ-\overline{\circ}$

a. みの 裳 (言い切り)



b. 裳は入用だよ。(助詞付き)

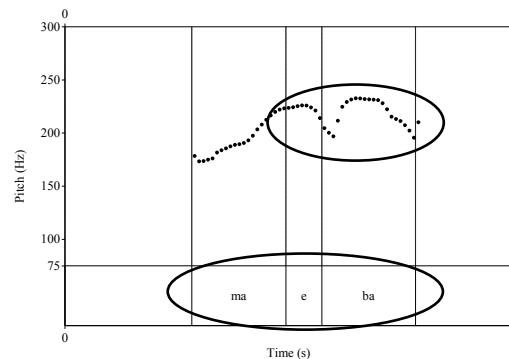
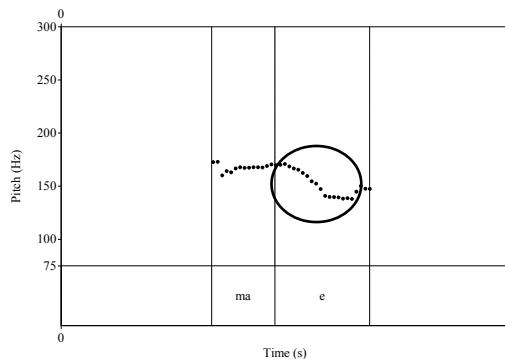


21. 尾高型：言い切り ○○、助詞付き ○○-○

a. 前（言い切り）

b. 前ば（助詞付き）

“前を”



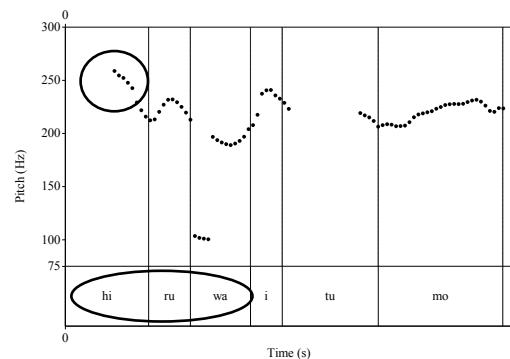
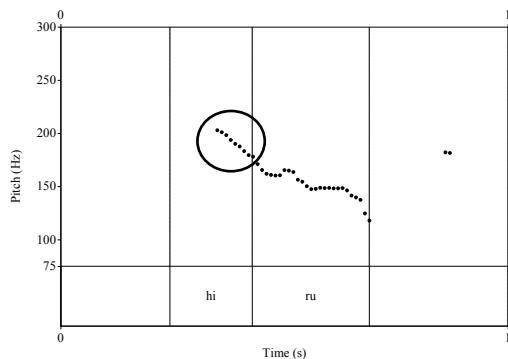
22. 頭高 B 型：言い切り、助詞付きともに 1 拍目が高くなる¹⁴。（言い切り ○○、助詞

付き ○○-○）

a. 昼（言い切り）

b. 昼はいつも＜家さいるよ＞（助詞付き）

“昼はいつも家にいるよ。”



アクセントを導く規則を検討すると、頭高型、尾高型に関しては A 氏と同じ規則によつて捉えられるが、頭高 B 型が問題として残る。A 氏で観察された無核型が観察されず、それに置き換わる形で頭高 B 型が観察されたことを考慮すると、頭高 B 型というのは実は上

¹⁴ 4 拍名詞など、比較的長めの語彙では、1 拍目を起点としてそこから緩やかに下がるような音調が得られた。これを考慮すると、1 拍目が高くなるとするよりも、1 拍目を起点として下降調が生じるとしたほうが適切かもしれない。

げ核がない型（すなわち無核型）であり、B氏の場合、上げ核がない語においては1拍目のみが高くなるような音調が実現する、とする分析案が考えられる。これに関わる部分のみ、A氏の規則から変更を加え、定式化すれば以下のようなになるだろう。

23. B氏のアクセント型を導く規則

- i. '以前の拍を低音調とし、'以降の拍を高音調とせよ。
- ii. 'がない場合、1拍目を高音調とせよ。

例 /ヒル/→ヒル、/ヒル-ワ/→ヒル-ワ

- iii. 言い切りの発話では語末拍を低音調とせよ。ただし語末拍のみが高音調をもつ場合、その高音調を維持し、低音調と合わせ下降調とせよ。

※ 規則 iii は規則 i が適用されたのちに適用される。

3.2.2. 頭高B型の下位分類

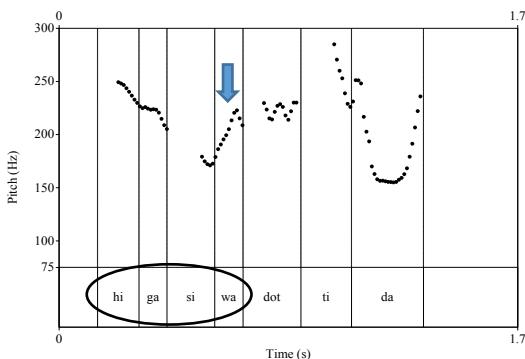
B氏のアクセントパターンは概ね上記(23)の規則で導き出せると考えられるが、今一つ考慮すべき点として、頭高B型の助詞付きの形が挙げられる。観察した限りでは、頭高B型の中には助詞がついた際に、その助詞が高音調を伴なうものとそうでないものの2種類があった。

24. 頭高B型（助詞上昇あり）

言い切り：○○○、助詞付き：○○○-○

例：ひがし

「ひがしはどうっちだ」のピッチ曲線：矢印の部分（助詞拍）で高音調が生じる。

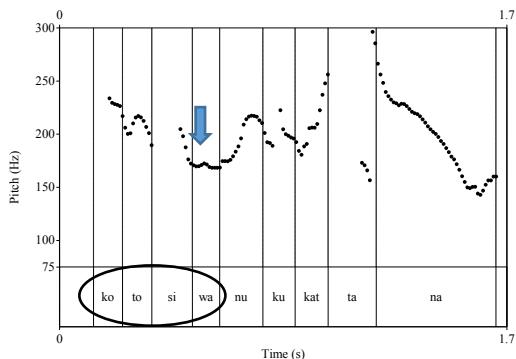


25. 頭高 B 型（助詞上昇なし）

言い切り：○○○、助詞付き：○○○-○

例：ことし

「ことしはぬくかったな」「今年は暑かったな」のピッチ曲線：矢印の部分（助詞拍）で高音調が生じていない。



上昇があるのは助詞を強調するイントネーションによるものとみることもできるが、仮にアクセントによるものだとした場合、頭高 B 型は助詞拍に高音調をもたらすものともたらさないもの、という形でさらに下位分類されることになる¹⁵。イントネーションによるものか、アクセントによるものか、今後明らかにしていく必要があるだろう。なお、補遺の語彙リストにおいては、この上昇があるかないかによっても語彙を分類した。

4. 今後の課題

今回は限られたデータ、かつ語彙収集を主眼としており、アクセント研究を主眼としていないデータからではあるが、八戸市方言の名詞のアクセント型に関する考察を行った。A 氏、B 氏ともにそのアクセント型は上げ核を想定することで説明可能であると考えられる。しかし、上げ核をもたない語（A 氏で言うところの無核型、B 氏で言うところの頭高 B 型）に対してどのような音調を与えるかに関して両氏の間で異なる想定をしなければならない点、および 3.2.2. 節で述べた B 氏の頭高 B 型の下位分類に関しては今後さらに検討していく余地があるだろう。

¹⁵ 仮にアクセントとするなら、例えば助詞上昇ありの名詞では /ひがし'〇/ のようにその末尾に上げ核が指定されている空の拍があり、言い切りの際はそれが削除されると考える必要があるだろう。

5. 補遺一語彙リスト

5.1. A 氏（合計 142 語）

5.1.1. 1 拍（4 語）

- i. 無核（1例）：日
- ii. 尾高（2例）：蚊、火
- iii. 助詞付きのデータがないため、無核か尾高か判断がつかなかったもの（1例）：巣

5.1.2. 2 拍（77 語）

- i. 無核（24 語）：影、蛸、葦、ノミ、鳩、豚、もや、雲、亀、桑、茎、月、犬、石、蝶、土、島、猫、波、浜、泡、海、山羊、げろ “大きめのカエル”
- ii. 頭高（17 語）：いか、胡麻、松、竹、梅、桃、貝、蟹、べこ “牛”、蟻、蜘蛛、鷹、風、星、鮫、海老、橋、水
- iii. 尾高（6 語）：もみ、わら、粟、ひえ、うり、雨
- iv. 言い切りの形から頭高と目されるが、助詞付きの形をとれていないもの（7 語）：虹、丘、虫、蜂、川、せみ、とり¹⁶
- v. 助詞付きのデータがないが、言い切りの形から無核か尾高のどちらかと目されるもの（23 語）：花、種、苗、稻、米、麦、かや、いも、まめ、とげ¹⁷、つぶ “巻貝（の一種）”、ふか “鮫、「鮫」との意味上の区別はない”、馬、角、蠅、うじ、羽、空、山、砂、露、潮、よが “夜に現れる蚊”

5.1.3. 3 拍以上（60 語）

- i. 無核（15 語）：からす、けーる “小さめのカエル”、たまご、たんぼ、ばった、むぎわら だいこん、つのまた、やどかり、かまきり、蜘蛛の巣、生き物、洞窟、かたつむり、いなびかり
- ii. 頭高（10 語）：ひとで、うなぎ、とびうお、いるか、港、浅瀬、あかり、きゅうり、たてがみ、遠浅
- iii. 尾高（6 語）：うさぎ、なまこ、ねずみ、しらみ、はたけ、はらっぱ
- iv. 中高（4 語）：いちご、くじら、すすき、みかん
- v. 助詞付きデータはないが、言い切りの形から頭高と目されるもの（2 語）：地震、みずたまり

¹⁶ 鶏の意もある。

¹⁷ とさかの意もある。

- vi. 助詞付きデータはないが、言い切りの形から中高と目されるもの(2語)：かぼちゃ、あぜみち（アクセント核も付すと、あぜ'みち）
- vii. 助詞付きのデータがないが、パターンから無核か尾高のどちらかと目されるもの(13語)：よもぎ、菜っ葉、きのこ、かんぜ“うに”、ひかり、うろこ、かいこ、みみず、とんぼ、すずめ、かみなり、たつまき、おっぱこ“尾”
- viii. 音調がどの型にも当てはまらず検討保留としたもの(8語)：うづら、けむり、きかな、かつお、さつまいも、きくらげ、とうがらし、ゴーヤ

5.1.4. 形容詞であるため、考察から除外したもの(1語)

まぶしい

5.2. B 氏(合計 91 語)

5.2.1. 1 拍(2語)

- i. 頭高(1語)：湯
- ii. 指小辞 /-Qko/ がついた例しか確認できず、その語のみのアクセントが不明なもの(1語)：緒(指小辞がついた音調はオッコ)

5.2.2. 2 拍(49語)

- i. 頭高(17語)：味噌、蓑、すそ、内、奥、かど、傍^{そば}、秋、足袋、汁、粕、裏、外、中、おび、跡、布
- ii. 頭高 B 型
 - a. 助詞上昇なし(13語)：道、村、右、横、上、餅、お茶、昼、酒、かび、底、冬、西
 - b. 助詞上昇あり(6語)：時、坂、今、塩、年、今日
- iii. 尾高(4語)：前、春、夜、下駄
- iv. 助詞付きのデータがないが、パターンから頭高か頭高 B 型のどちらかと目されるもの(6語)：夏、朝、えり、そで、紐、崖
- v. 音調がどの型にも当てはまらず検討保留としたもの(3語)¹⁸：ひま(ひまが)、きた

¹⁸ 「ひま」は助詞付き(ひまが)においてはその後ろに言いよどみによるポーズがあった。こ

(きたは)、した (したさ)

5.2.3. 3 拍以上 (38 語)

- i. 頭高 (8 語)：まんま “飯”、昔、南、草履、模様、着物、後ろ、昨日
- ii. 頭高 B 型
 - a. 助詞上昇なし (8 語)：雑炊、西風、今年、来年、おかゆ、隣、明け方、再来年
 - b. 助詞上昇あり (14 語)：頂上、東、明日、左、砂糖、表、てぬぐい、去年、あさって、おととし、やがさって “しあさって”、おととい、さとうきび、はかも
- iii. 助詞付きのデータがないが、パターンから無核か頭高のどちらかと目されるもの (3 語)：翌日、夜中、こよみ
- vi. 音調がどの型にも当てはまらず検討保留としたもの (5 語)：

ゆうがた (ゆうがた-に)、やませ (助詞付きデータなし) “東北の風”、

ひがしかぜ (助詞付きデータなし)、きたかぜ (きたかぜも)、

みなみかぜ (みなみかぜが)

5.2.4. 形容詞であるため、考察から除外したもの (2 語)

甘い (音形は [amε̥])、しょっぱい

参考文献

上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」大野晋・柴田武 (編)『岩波講座 日本語5 音韻』281-320. 東京：岩波書店.

れによる自然下降が生じたと考えればこの本来の音調は「ひまが」であり、頭高だとみなすことができる。また、「きた、した」は第1拍の母音が無声化していた。この無声化が音調の実現に影響を与えた可能性がある。